

# 『満文原檔』所収モンゴル語文書の文法的特徴について

海蘭(かいらん)\*

Grammatical Features of the Mongolian Documents Involved in *Man-wen Yuan-dang*  
(満文原檔)

HAILAN

## 要旨

モンゴル文語の歴史において、古典式モンゴル文語は16世紀後半から規範化が進んだモンゴル文語である。『満文原檔』所収モンゴル語文書(以下「モンゴル語文書」)は17世紀前半に書かれた文書資料である。モンゴル語文書と古典式モンゴル文語の文法的語尾を比較するとモンゴル語文書には、古典式モンゴル文語に見られない語尾、或いは使い方が異なる語尾がある。モンゴル語文書の文法的語尾には古典式モンゴル文語と異なって口語的要素が多く含まれている。この口語的要素は現代モンゴル口語と一致するところがある。例えば、格語尾の属格語尾は現代モンゴル文語では語尾 *-un/-ün* と *-yin* が語幹の末字の種類によって書き分けられているが、口語ではいずれも [i:n] あるいは [i:n] と発音される。同様にモンゴル語文書の属格語尾 *-yin* も語幹の末字の種類による使い分けが無い。また、モンゴル語文書に現れた口語的要素の中には現代モンゴル文語の語尾として定着したものもある。例えば、モンゴル語文書の与位格語尾の *-tu/-tü* と *-du/-dü* は口語の現われと考えられる語尾であるが、これが現代モンゴル文語では文語の語尾として定着している。

要するに、モンゴル語文書の中で古典式モンゴル文語に無い文法的語尾が現れるのは、それに口語的要素が含まれるからである。

キーワード : モンゴル語文書、古典式モンゴル文語、文法的語尾、口語の現われ、現代モンゴル語

Keywords : Mongolian documents, Classical Written Mongolian, Grammatical suffixes, Influence of spoken language, Modern Mongolian

## 目次

1. はじめに
2. 名詞の曲用語尾
  - 2.1. 属格語尾
  - 2.2. 与位格語尾
  - 2.3. 对格語尾

---

\*東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程

### 3. 動詞の活用語尾

#### 3.1. 終止形語尾

##### 3.1.1. 現在未来語尾

##### 3.1.2. 過去語尾

#### 3.2. 副動詞形語尾

##### 3.2.1. 条件副動詞語尾

##### 3.2.2. 譲歩副動詞語尾

##### 3.2.3. 並列副動詞語尾

#### 4. おわりに

## 1. はじめに

『満文原檔』は台湾の國立故宮博物院より 2005 年に出版された清太祖、太宗時代、つまり 17 世紀前半の満洲国の檔案(政府公文書)の写真版による複写資料集全 10 冊である。

『満文原檔』は、表題が示すように、ほとんどが満文(満洲語)による檔案であるが、一部にモンゴル語および漢語で書かれた檔案が含まれている。モンゴル語の文書は、『満文原檔』全 10 冊のうち、第三、四、五、六、七、八、九、十冊の各所に分散しており、合計 47 件を数える。それぞれの文書の長さは数行から数十行にわたり様々であり、それらの内容は 1621(天命 6)年から 1636(天聰 10)年の間に満洲側とモンゴル側で交わされた交渉に関するものがほとんどである。

『満文原檔』とそれにおけるモンゴル語文書については『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』[栗林均・海蘭 2015]で紹介している。本論文では、『満文原檔』におけるモンゴル語文書を「文書」と呼ぶ。

李保文により、「文書」の紹介、研究、翻訳が行われているが言語学的研究は行われていない。[李保文・南快 1996: 第一期 86-118、第二期 93-122][李保文 2000: 217-276][李保文 2001: 第 3 期 3-8、第 4 期 3-9][李保文 2002: 第 1 期 3-4]

「文書」は 17 世紀前半のモンゴル語資料である。この時代は大量のチベット仏教の経典がモンゴル語に翻訳され、木版によって出版されている。「カンジュール」に代表されるこの時代における木版の仏典にみられる規範化されたモンゴル文語は、N.Poppe によって Classical Written Mongolian「古典式モンゴル文語」と呼ばれた。これに対して、「文書」のモンゴル文語は「古典式モンゴル文語」と比べて、それほど規範が厳密でない「世俗的モンゴル文語」の文献である。

古典式モンゴル文語の文法的語尾と「文書」に現れる文法的語尾を比較すると「文書」には古典式モンゴル文語の規範からはずれる文法的語尾が使われている。本稿ではこのような相違点が生じた原因について検討する。

古典式モンゴル文語は N.Poppe の *Grammar of Written Mongolian*(1954)を参考にし、転写方式もそれに若干の変更を付け加えた(付け加えた部分については本文中の随所で説明する)。

## 2. 名詞の曲用語尾

古典式モンゴル文語と「文書」に現れる名詞の曲用語尾を比較すると、格語尾に相違点が多く現れる。表 1 は古典式モンゴル文語と「文書」に現れる格語尾の比較である。「文書」の属格、与位格、対格には古典式モンゴル文語に使われる語尾の他に、古典式モンゴル文語にない語尾、或いは語幹末字の種類による使い分けが違う語尾が現れる(表では網かけをした箇所)。奪格、造格、共同格の語尾は両者ではほぼ同じ形と使い分けを持つ。

表 1 古典式モンゴル文語と「文書」に現れる格語尾の比較

	語幹末字の種類	古典式モンゴル文語	「文書」
属格	子音字 n	-u/-ü	
		現れない	-i
		現れない	-yin(注 1)
	n 以外の子音字	-un/-ün	
		現れない	-yin
母音字	-yin		
与位格	子音字 b g γ r s d	-tur/-tür	-tu/-tü
			-du/-dü
	母音字と子音字 n m l ng	-dur/-dür	-tur/-tür
			-dur/-dür
対格	母音字	-yi	
		現れない	-gi
		現れない	-i_yi
		現れない	-i_gi
	子音字	-i	
		現れない	-i_yi
		現れない	-i_gi
奪格	語幹末字と関係ない	-ača/-eče	
造格	母音字	-bar/-ber	
	子音字	-iyar/-iyer	
共同格	語幹末字と関係ない	-luγa/-lüge	

次に、「文書」の格語尾の属格、与位格、対格に古典式モンゴル文語と異なる語尾、或いは語幹末字の種類による異なる使い分けを持つ語尾が現れた理由について検討する。

## 2.1. 属格語尾

古典式モンゴル文語の属格語尾には語尾 *-u/-ü*、*-un/-ün*、*-yin* の3種類がある。子音字 *n* で終わる語幹に語尾 *-u/-ü* が付き、*n* 以外の子音字で終わる語幹に語尾 *-un/-ün* が付き、母音字で終わる語幹に語尾 *-yin* が付く。この使い分けは、現代モンゴル文語の正書法の規範としても確立している。

「文書」に現れる属格語尾は古典式モンゴル文語の *-u/-ü*、*-un/-ün*、*-yin* という3種類の語尾のほか、*-i* という語尾が現れる。また、語尾 *-yin* の使い分けには古典式モンゴル文語と違うところが見られる。

「文書」では、子音字 *n* で終わる語幹に *-u/-ü*、*-i*、*-yin* の3種類の語尾が付く。*-u/-ü* は47回、*-i* は129回、*-yin* は1回現れる。*-u/-ü* は古典式モンゴル文語と同じ使い分けがなされる。「文書」ではこれに加えて *-i* が数多く用いられている。1回だけ現れる *-yin* は誤記の可能性はある。

「文書」で子音字 *n* で終わる語幹に付く3種類の語尾の出現回数は表2のとおりである。

表2 子音字 *n* で終わる語幹に付く属格語尾

子音字 <i>n</i> で終わる語幹に付く属格語尾	<i>-u/-ü</i>	<i>-i</i>	<i>-yin</i>
出現回数	47	129	1

以下の例では、語尾 *-u/-ü* と *-i* が同じ単語に使われている。

*-u/-ü*

kümün-ü「人の」

*-i*

kümün-i「人の」

qaγan-u「皇帝の」

qaγan-i「皇帝の」









1回現れる語尾 *-yin* は満洲語の訳を見ると Činon bira-i「チノン河の」[満文老檔研究会訳注1961:509]であり、「文書」に現れるのは Činon-yin γool-yin「チノン河の」である。Činon に付く *-yin* は満洲語訳に反映されていない(注2)。

*-yin*

Činon-yin「チノンの(川の名前)」

「文書」では、*n* 以外の子音字で終わる語幹には語尾 *-un/-ün* と *-yin* が付く。*-un/-ün* は59回、*-yin* は47回現れる。*-un/-ün* と *-yin* という二つの語尾の出現回数に大きな違いはなく、これら

に使い分けの違いは認められない。例えば、以下の例では、語尾 -un/-ün と -yin が同じ単語に使われている。

-un/-ün	-yin
 ayil-un「戸の」	 ayil-yin「戸の」
 Čaqar-un「チャハルの」	 Čaqar-yin「チャハルの」
 Čerig-ün「軍の」	 Čerig-yin「軍の」
 jasay-un「ジャサクの」	 jasay-yin「ジャサクの」

母音字で終わる語幹には語尾 -yin が付く。これは古典式モンゴル文語の属格語尾の使い分けと同じである。

-yin	-yin
 tngri-yin「天の」	 manju-yin「満洲の」





「文書」の属格語尾には古典式モンゴル文語の属格には無い -i という形が現れる。-yin は語幹末字の種類による使い分けが異なる場合がある。

子音字 n で終わる語幹に語尾 -i が数多く付くのは、当時の口語の露出であると考えられる。現代のハルハ方言では、子音字 n で終わる語に付く語尾は [-i:] である。例えば、[noɟɔni:]「ノヤンの」、[xa:ni:]「皇帝の」[N.Poppe 1951: 59]。

現代モンゴル文語の属格には語尾 -u/-ü、-un/-ün、-yin の 3 種類がある。子音字 n で終わる語幹に語尾 -u/-ü が付き、n 以外の子音字で終わる語幹に語尾 -un/-ün が付き、母音字で終わる語幹に語尾 -yin が付く。現代モンゴル口語では語尾 -un/-ün と語尾 -yin は語幹末の種類にかかわらず、いずれも男性語に付く場合に [ɪ:n]、女性語に付く場合に [i:n] と発音される[清格爾泰 1991: 153] (注 3)。「文書」には現代モンゴル口語と一致する語尾が現れている。現代モンゴル口語のこうした特徴は 17 世紀前半にすでに存在していて、それが上のような表記に反映されていると考えられる。

要するに、「文書」の属格語尾に古典式モンゴル文語と違った語尾 -i と語幹末字の種類による使い分けが異なる語尾 -yin が現れたのは、当時の口語の露出したものとみなすことができる。

## 2.2. 与位格語尾

古典式モンゴル文語の与位格語尾は -tur/-tür、-dur/-dür である。古典式モンゴル文語の与位格語尾の -tur/-tür は語幹末が子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語に付く。-dur/-dür は語幹末が母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語に付く。



















「文書」に現れる与位格語尾には 、、、 の4つの形が現れ、これらの形は語幹末字によって区別されずに使われている。、、 の4つの形の実際の現れる状況は表3の通りである。語尾 -tu/-tü の出現回数が一番多く、147回現れる。2番目に多く現れる語尾は -du/-dü である。-tur/-tür と -dur/-dür は出現回数が少ない。


表3 「文書」における与位格語尾の使われる状況



語尾	合計	①子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語	②母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語
 -tu/-tü	147回	35回	112回
 -du/-dü	39回	8回	31回
 -tur/-tür	15回	7回	8回
 -dur/-dür	3回	1回	2回


-tu/-tü が ①子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語に付く例： tus-tu「当主に」


②母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語に付く例： mayu-tu「悪いことに」


-du/-dü が ①子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語に付く例： qonuγ-du「宿泊に際して」




②母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語に付く例： qayan-du「皇帝に」





-tur/-tür が ①子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語に付く例： tabar-tur「物に」



②母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語に付く例： egün-tür「これに」

ᠮᠤ-dur/-dūr が ①子音字 b、g、γ、r、s、d で終わる語に付く例： ulus-dur「国に」

②母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語に付く例： qalq-a-dur「ハルハに」

「文書」の与位格語尾には  -tu/-tü の形が数多く使われている。先古典式モンゴル文語の与位格語尾には  -tur/-tūr(-dur/-dūr) の形が使われていた[栗林均 1999 : 127]。接尾辞頭に  t(d) 形が使われる状況は先古典式モンゴル文語の表記の規範が引き継がれている可能性がある。

「文書」に現れる  -tu/-tü の形は先古典式モンゴル文語の  と違って末尾の子音字 r が無い。末尾の r が脱落したのは口語の影響を受けたことによると考えられる。より古い時代の口語にも -du/-dü、-tu/-tü の形があった。古い口語が記されているといわれる文献資料であるムカッディマト・アル・アダブには -du/-dü、-tu/-tü の記載がある[舍・羅布蒼旺丹 勒・宝魯特 1991 : 204]。例えば次の例に -du/-dü、-tu/-tü が使われている。amandu「口に」[H.H Ponne 1939 : 100]、ügedü「言葉に」[H.H Ponne 1939 : 128]、jarliqtu「命令に」[H.H Ponne 1939 : 381]、gertü「家に」[H.H Ponne 1939 : 110](注 4)。従って、「文書」に数多く現れた与位格語尾  -tu/-tü と  -du/-dü は当時の口語の露出であると考えられる。

「文書」の与位格語尾には古典式モンゴル文語と違った語尾が現れたのは、当時の口語的要素が含まれるからである。当時の口語の現れと思われる語尾  -tu/-tü と  -du/-dü は現代モンゴル語で文語の形として定着している(注 5)。

### 2.3. 対格語尾

古典式モンゴル文語の対格語尾には -yi と -i という 2 種類の形がある。語尾 -yi は母音字で終わる語幹に付き、語尾 -i は子音字で終わる語幹に付く。この使い分けは、現代モンゴル文語の正書法の規範としても確立している。



「文書」においても、これと同様の傾向がみられるが、母音字で終わる語幹には、上記以外にも -gi、および語幹に接続した -i、さらにそれらを組み合わせた形が現れる。

「文書」に現れる対格語尾は、-yi、-i、-gi、-i\_yi、-i\_gi の 5 種類である。「\_」(アンダースコア)は語尾が分綴されている場合に用いる記号として用いている。

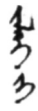
-yi : 母音字で終わる語幹に付き 45 回現れる。 例： yala-yi「罪を」


-i : 子音字で終わる語幹に付き、150 回現れる。 例： qoyar-i「二人を」

-gi： 母音字で終わる語幹に付き、33 回現れる。


例： yala-gi「罪を」  mayu-gi「悪いことを」


-i\_yi： 母音字と子音字で終わる語幹のどちらにも付き、4 回現れる。

母音字で終わる語幹に付く例： yala-i\_yi「罪を」

子音字で終わる語幹に付く例： tan-i\_yi「汝等を」

-i\_gi： 母音字と子音字で終わる語幹のどちらにも付き、7 回現れる。

母音字で終わる語幹に付く例： yala-i\_gi「罪を」

子音字で終わる語幹に付く例： man-i\_gi「我らを」

「文書」には、古典式モンゴル文語に無い語尾 -gi、-i\_yi、-i\_gi が現れる。

ここでは語尾 -yi、-gi、-i\_yi、-i\_gi という 4 種類の形が同じ語幹 yala「罪」に付いて、区別なく使われていることが特に注目に値する。

第 1 に、yala-yi「罪を」という形は古典式モンゴル文語の規範と一致する。

第 2 に、yala-gi「罪を」の語尾 -gi は語尾 -yi の発音(読み方)と関係している。19 世紀の前半に書かれた『蒙文詮釈』では、「語尾 -yi は母音字で終わる語幹に付き、gi で発音される」として (yi üsüg-i a ai au ene yurban toloyai-yin üsüg-üd-ün door-a bičijü kereglemüi. …edeger-i čöm gi kemen dayudamui.「語尾 -yi は a ai au の字頭に付く、つまり語幹末が母音字の語に付く。…これらはすべて gi と読む」)[嘎拉桑 1979: 139-165]。同様に、「文書」に現れた語尾 -gi は語尾 -yi の発音(読み方)によるものと考えられる。

第 3 に、yala-i\_gi「罪を」は、口語の影響を受けた形と考えられる。現代モンゴル口語では語尾 -yi と -i は[gi:/gi:] 或いは[ri:/i:gi:]によって発音される[清格爾 1991: 153]。現代モンゴル口語では語幹末が長母音、複合母音の場合は[gi:/gi:]によって発音され、語幹末が子音の場合は[ri:/i:gi:]によって発音される。現代モンゴル口語では yala「罪」が[jal]と発音される。現代モンゴル口語で yala「罪」は子音で終わる語であり、それに付く対格語尾は[ri:]である。従って「文書」に現れた語尾 -i\_gi は当時の口語での発音を反映した表記である可能性がある。

第 4 に、yala-i\_yi「罪を」の -i\_yi は上に述べた語尾 -i\_gi の gi を yi に書き換えたものである。



要するに同じ語幹 yala「罪」に語尾 -yi の他、語尾 -gi、-i\_yi、-i\_gi が付いたのはいずれも当時の口語の露出であり、その発音をどのように表記するか定まった表記法が無かったために、このような表記のゆれが生じたものと考えられる。

語尾 -gi は上の例にも挙げたように、語幹 mayu「悪い」に付いて、2 回現れる。現代モンゴル口語では mayu「悪いこと」は[mu:]であり、語幹末が長母音であり、それに付く対格語尾は[gr:]である。現代モンゴル口語の発音を考慮に入れば、「文書」に現れた語尾 -gi は口語の露出であると考えられる。

### 3. 動詞の活用語尾

「文書」には古典式モンゴル文語にない活用語尾、或いは使われる頻度が異なる活用語尾が現れる。それは主に終止形語尾の現在未来語尾、過去語尾と条件、譲歩、並列の副動詞形語尾に現れる。古典式モンゴル文語と「文書」の形動詞形語尾と連合、分離、限界、継続、随伴の副動詞形語尾の使い方には目立った違いは認められない。「文書」には古典式モンゴル文語の即刻副動詞、目的副動詞の語尾は現れない。

表 4 は古典式モンゴル文語と「文書」に現れる動詞の活用語尾の比較である。「文書」には、古典式モンゴル文語にない終止形の現在未来語尾 -m、-mu と古典式モンゴル文語ではあまり使われない語尾 -nam/-nem が多く現れる。過去語尾には古典式モンゴル文語にない語尾 -la/-le と -či が現れる。また、「文書」には古典式モンゴル文語で使われない条件副動詞語尾 -sa と -qula/-küle、譲歩副動詞語尾 -bači と -ba、並列副動詞語尾 -ji と -či が使われる(表では「文書」に特徴的な語尾に網かけをしている)。

表 4 古典式モンゴル文語と「文書」に現れる動詞の活用語尾の比較

		古典式モンゴル文語	「文書」
終止形	現在未来語尾	-mui/-müi	
		-nam/-nem(通常現れない)	-nam/-nem(多く使われる)
		-yu/-yü	現れない
		現れない	-m
		現れない	-mu
	過去語尾	-ba/-be	
		-bai/-bei	現れない
		-luya/-lüge	
		現れない	-la/-le
		-juqui/-jüküi (-čuqui/-čüküi)	現れない
	現れない	-či	

		古典式モンゴル文語	「文書」
形動詞形語尾	行為主	単数	-γčī/-gčī
		複数	-γčīn/-gčīn
	予定	-qu/-kü, -qui/-küi	
	完了	-γsan/-gsen	
副動詞形語尾	条件	-basu/-besü(-baḷa/-bele)	
		現れない	-sa
		現れない	-quḷa/-küle
	譲歩	-baču/-bečü	現れない
		現れない	-bačī
		現れない	-ba
	並列	-jū/-jü	
		現れない	-jī
		-ču/-čü	
		現れない	-či
	連合	-n	
	分離	-γad/-ged	
	限界	-tala/-tele	
	継続	-γsaγar/-gseger	
	即刻	-maγča/-megče	現れない
	随伴	-quḷ, -quḷa/-küle	
目的	-r-a/-r-e	現れない	

### 3.1. 終止形語尾




終止形語尾は、文の述語になり文を終止させる動詞に付く。時制によって、現在未来語尾と過去語尾に分けられる。

#### 3.1.1. 現在未来語尾



古典式モンゴル文語では -mui/-müi、-nam/-nem、-yu/-yü の3種類の現在未来語尾が使われる。語尾 -mui/-müi と語尾 -yu/-yü が多く使われるが、語尾 -nam/-nem は使われる頻度が少ない (less usual in the classical language) [N.Poppe 1954: 92] 語尾である。

「文書」には、動詞の現在未来語尾として -m、-mu、-müi、-nam/-nem の4種類の形が現れる。「文書」に現れる終止形の現在未来語尾のうち、数多く現れるのは語尾 -nam/-nem であり、40回現れる。出現回数が最も少ないのは -müi であり、1回しか現れない。そのほかに語尾 -m は7回、-mu は2回現れる。

語尾 -m -mu -müi -nam/-nem の例 :

-m	-mu	-müi
 irem「来る」	 sanamu「思う」	 öčimüi「申す」

語尾 -nam/-nem の例 :

 amaldanam「誓う」	 genem「～そうだ」
---	---

「文書」に使われている現在未来語尾 -m の出現回数は語尾 -müi と -mu の出現回数より多い。また、古典式モンゴル文語に通常使われない -nam/-nem が「文書」に数多く使われるのは当時の口語の露出と考えられる。

終止形の現在未来語尾 -m はモンゴル系の言語である保安語とモンゴル語に使われている。また、モゴール語には、語尾 -m と -nam/-nem が使われている[舍・羅布蒼旺丹勒・宝魯特 1991 : 412]。

[M.H. 奥爾洛夫斯卡娅著 郭守祥译 2004 : 92]では、語尾 -nam/-nem は連合副動詞語尾 -n と a-mu < a-mui との連合と見なしている。小沢[小沢重男 1997 : 133]によれば語尾 -nam/-nem は 17 世紀以後の文献に見られる現在未来語尾であるとしている。しかし、先古典期モンゴル口語資料と言われるムカッディマト・アル・アダブ(Мукаддимат ал-адаб)にも語尾 -m と -nam/-nem が現れる。例えば: abunam「取る」[H.H. Поппе 1939 : 457]、üiledünem「～をし合う」[H.H. Поппе 1939 : 376]、kürüm「着く」[H.H. Поппе 1939 : 160]。

これによって考えられるのは、語尾 -m と -nam/-nem はより古い時代から口語として使われていた可能性があるということである。N.Poppe によれば、「古典式モンゴル文語の文法は口語の要素が除去され、すべての矛盾が取り除かれた(the grammar of the written language was purged of colloquial elements, and all inconsistencies were eliminated)」[N.Poppe 1954 : 3]。そのため、古典式モンゴル文語では口語的要素の -m が排除されたと考えられる。

現代モンゴル文語で現在未来語尾として通常使われるのは -na/-ne であり、-nam/-nem は使われることが少ない。

このように、「文書」の終止形の現在未来語尾に古典式モンゴル文語と違った語尾が現れるのは口語的要素が露出しているものと考えられる。



### 3.1.2. 過去語尾

古典式モンゴル文語の終止形の過去語尾には -ba/-be、-bai/-bei、-luᠢᠶa/-lüge、-juqui/-jüküi (-čuqui/-čüküi)がある。

「文書」の過去語尾には -ba/-be、-la/-le、-lüge、-či が現れる。-ba/-be は 89 回、-la/-le は 7 回、-lüge は 1 回、-či は 1 回現れる。

語尾 -ba/-be、-la/-le、-lüge、-či の例：

-ba/-be

 dobtulba「攻撃した」       irebe「来た」

-la/-le

 yabula「行った」       irele「来た」

-lüge

 bölüge「…である」

-či

 abči「取った」

「文書」に現れる過去語尾 -ba/-be は古典式モンゴル文語の -ba/-be と -bai/-bei に対応し、語尾 -la/-le と -lüge は古典式モンゴル文語の語尾 -luγa/-lüge に対応する。語尾 -či は古典式モンゴル文語の -čuqui/-čüküi (-juqui/-jüküi) に対応する。

古典式モンゴル文語と「文書」に現れる動詞の終止形の過去語尾の対応を表で示せば、表 5 の通りである。

表 5 古典式モンゴル文語と「文書」に現れる動詞の終止形の過去語尾の対応

	古典式モンゴル文語	「文書」
過去語尾	-ba/-be、-bai/-bei	-ba/-be
	-luγa/-lüge	-la/-le、-lüge
	-juqui/-jüküi (-čuqui/-čüküi)	-či

現代モンゴル文語では、過去語尾に -ji/-či、-jai/-jei (-čai/-čei)、-ba/-be が使われる。-ji/-či はその後助詞や別の動詞が後続する場合に用いられ、[-dʒ]/[-tʃ] と発音される。-jai/-jei (-čai/-čei) は文末で使う形であり、[-dʒe:] (-tʃe:) と発音される。-ba/-be は文語的な

形であり、口語では使われず疑問や物語を叙述する場合に使われる。

「文書」に現れた語尾 *-či* は現代モンゴル文語の過去語尾 *-ji/-či* に対応する。「文書」に現れる過去語尾 *-či* は後ろに動詞 *genem* 「～と言う」が付く形で現れている。これは、現代モンゴル文語と同じ使われ方を持つということである。

現代モンゴル文語では動作の始まる場合と終わる場合を表わす動詞語尾 *-la/-le* があり、現代モンゴル口語では、母音調和によって *[-laɪ, -ləɪ, -lɔɪ, -loɪ]* と発音される。「文書」に現れた過去語尾 *-la/-le* は現代モンゴル文語の過去語尾 *-la/-le* に対応する。しかし、「文書」には語尾 *-la/-le* の例は 7 回しか現れないため、現代モンゴル文語のように動作の始まる場合と終わる場合を表すかどうかは判定できない。

「文書」の過去語尾に、古典式モンゴル文語と異なる語尾 *-či* と *-la/-le* が現れたのは、現代モンゴル口語の特徴 (*[-dʒ]/[-tʃ]* と *[-laɪ, -ləɪ, -lɔɪ, -loɪ]*) が 17 世紀前半に存在していた可能性があると考えられる。その口語的要素 *-či* と *-la/-le* が現代モンゴル文語では文語形として定着したと推測することができる。

以上のことから、現代モンゴル口語の発音を考慮に入れば、「文書」に現れた、古典式モンゴル文語と異なる過去語尾は当時の口語の露出であると考えることができる。

### 3.2. 副動詞形語尾

副動詞は動詞を修飾する働きを持つ。「文書」の中では、並列副動詞、連合副動詞、分離副動詞、条件副動詞、譲歩副動詞、継続副動詞、限界副動詞、随伴副動詞が現れる。この中では条件副動詞語尾、譲歩副動詞語尾、並列副動詞語尾には古典式モンゴル文語にある語尾の他に、それと異なる語尾が現れる。

#### 3.2.1. 条件副動詞語尾

古典式モンゴル文語の条件副動詞語尾は *-basu/-besü* である。「文書」の条件副動詞語尾には語尾 *-basu/-besü*、*-sa*、*-qula/-küle* が現れる。*-basu/-besü* は 9 回、*-sa* は 17 回、*-qula/-küle* は 134 回現れる。

語尾 *-basu/-besü* の例：



yabubasu 「行けば」




ebdebesü 「破れば」

語尾 *-sa* の例：



bolusa 「～ならば」

語尾 -qula/-küle の例：

 yabuqula 「いけば」

 kiküle 「～すれば」

語尾 -basu/-besü はモンゴル文語の中で古くから用いられているモンゴル文語の条件副動詞語尾である。

語尾 -sa は「文書」では語幹 bol- のみに付き、介入母音 -u- が入り、bolusa 「～ならば」になっている。M.H. 奥洛夫斯卡娅によれば、17 世紀に書かれたモンゴル年代記である『黄金史』に幾つかの例外を除けば語尾 -sa は、すべて語幹 bol- に限って使われる [M.H. 奥洛夫斯卡娅著 郭守祥译 2004 : 167]。先古典期モンゴル口語資料とも言われる『元朝秘史』では、語幹 bol- に付く条件副動詞語尾は -asu であり、介入母音が入り、boluasus となっている [栗林均 2009 : 75]。語尾 -sa は現代モンゴル語にない形である。語尾 -sa と関係があると考えられる条件副動詞語尾がモンゴル系の言語であるダグル語(-a:s, -e:s, -ə:s, -o:s)、東郷語(-se)、保安語(-sə)に見られる。これにより、語尾 -sa は口語の露出の可能性がある。古典式モンゴル文語では口語的要素の語尾 -sa が排除されたと考えられる。

語尾 -qula/-küle は「文書」の中では最も多く使われる語尾であり、意味的には他の語尾 -basu/-besü、-sa と区別が無い。語尾 -qula/-küle に関して、N.Poppe によれば、古典式モンゴル文語では、語尾 -qula/-küle は随伴副動詞語尾として使われ、「時には条件副動詞語尾として使われていた。それは古典式モンゴル文語に存在しない典型的な口語形である」としている (Sometimes this form replaces the conditional converb. This converb does not occur in the classical language, as it is a typical colloquial form.) [N.Poppe 1954 : 98]。確かに、「文書」では語尾 -qula/-küle は条件副動詞語尾(「～すれば」)以外に随伴副動詞語尾(「～してから、～したらすぐ」)としても読み取れる例が現れる。例えば：

tabun noyad ireküle jöbleküi-yin tulada.. qayan-du elči yayaraĵu ĵaruy-a..

「五人のノヤン達が到着したら、相談するために、ハーンに使者を急いで遣わそう。」


以上のことから、「文書」に古典式モンゴル文語にない条件副動詞語尾が現れるのは口語的要素が含まれるからであると考えられる。

### 3.2.2. 譲歩副動詞語尾

古典式モンゴル文語の譲歩副動詞語尾は -baču/-bečü である。「文書」の譲歩副動詞語尾は -ba と -bači であり、それぞれ 2 回現れる。

語尾 -ba は 2 回とも同じ語幹 bol- に付く。1 回は助詞 čī が語尾 -ba の付いた副動詞の前に置かれる。もう 1 回は助詞 čī が副動詞の前に書かれていない。

語尾 -ba の例：

 bolba「なっても」

語尾 -ba は次の二つの文の中に使われている。

bide či bolba tan-i\_yi ende saγuɣaγu bisi.. čerig qariju kögeju Kerem γarγaγu..

「我らとしても 汝らをここに留ませはしない。兵を戻して、追って、ケレムの外に出す。」

qaɣiγai buruγu nutuγlaɣu yabuju ulus mal-iyan abtaγad ende kelekü kereg buyu.. bolba yaγu+bi tan-i maγu-gi sanamu.. čuγlaqu boljuγan-i γaɣar-a ire.. tende kelelčey-e..「間違った(ところに)居住して行って、(自分の)民と家畜を取られてここで言う必要があるか。それでも、何があるのか。汝らの悪いことを思うのか。集まる約束の土地に來い。そこで話し合おう。」

語尾 -bači の例：

 orubači「入っても」

 čidabači「出来ても」

N.Poppe によれば、古典式モンゴル文語では譲歩副動詞語尾は -baču/-bečü である。「通俗本 (popular books) ではしばしば語尾 -bači/-beči である。接尾辞 ču が副動詞の前に置かれる場合もある」(In the language of popular books the suffix is often -baci/-beci. As to the suffix -bači/-beči, the particle cu may precede the converb.) [N.Poppe 1954 : 98]。

「文書」に現れる譲歩副動詞語尾 -bači は、N.Poppe の挙げた通俗本 (popular books) の中に使われていた語尾 -bači/-beči と一致する。

現代モンゴル文語の譲歩副動詞語尾は古典式モンゴル文語と同様に -baču/-bečü である。現代モンゴル口語では語尾 -baču/-bečü の発音は [-btʃ] である [清格爾泰 1991 : 282]。現代モンゴル口語では語尾末の母音字が脱落し、発音されない。17 世紀前半の口語でも、語末の母音が明瞭に発音されず、現代モンゴル口語の [-btʃ] と近い音で発音されていた可能性がある。こうして、語尾に -bači/-beči という形が書かれたものと推定することができる。

つまり、「文書」に古典式モンゴル文語と違った語尾 -bači/-beči が現れたのは当時の口語的要素が反映されたものであると考えられる。

M.H. 奥尔洛夫斯卡娅によれば、譲歩副動詞語尾 -baču/-bečü は終止形の過去を表す語尾 -ba/-be と助詞 ču、或いは či の結合である [M.H. 奥尔洛夫斯卡娅著 郭守祥译 2004 : 169]。この語尾 -baču/-bečü の合成についての仮説が成り立てば、「文書」に現れた譲歩の意味の表現からその構成過程が推測される。「文書」では、助詞 či と過去語尾 -ba を持つ動詞が合わさって、譲歩の意

味を表していると考えられることができる。

### 3.2.3. 並列副動詞語尾

古典式モンゴル文語の並列副動詞語尾は -ju/-jü、-ču/-čü である。「文書」の並列副動詞には、古典式モンゴル文語と同じ語尾 -ju/-jü、-ču/-čü の他、語尾 -ji と -či が現れる。語尾 -ju/-jü と -ču/-čü が計 265 回現れ、語尾 -ji と -či が計 54 回現れる。

語尾 -ju/-jü、-ču/-čü、-ji、-či の例：

-ju/-jü

-ji

 irejü 「来て」

 ireji 「来て」

-ču/-čü

-či

 kürčü 「着いて」

 kürči 「着いて」

語尾 -ji は語尾 -ju/-jü の口語の現われであり、語尾 -či は語尾 -ču/-čü の口語の現われであると考えられる。N.Poppe も語尾 -ji と -či は非古典式モンゴル語(non-classical language)に使われ、これらの語尾が現れたのは口語の影響を受けたとしている[N.Poppe 1954: 96]。

現代モンゴル文語の並列副動詞語尾は古典式モンゴル文語と同じく -ju/-jü、-ču/-čü である。現代モンゴル口語での発音はそれぞれ[-dʒ]と[-tʃ]であり、語尾末の母音が脱落している。現代モンゴル口語の発音から推測すれば、17世紀前半の口語でも語末の母音は明瞭に発音されていなかった可能性がある。従って、これらは当時の口語的要素を反映していると考えられる。

## 4. おわりに

17世紀前半に書かれた「文書」には、同じ時代の木版によるチベット仏教經典の翻訳のモンゴル文語である古典式モンゴル文語と異なった文法的語尾が見られ、それらの文法的語尾は、「文書」における口語的要素と見なすことができる。

「文書」に現れた口語的要素には現代モンゴル口語と対応が見られるものがある。例えば、「文書」で属格語尾 -yin は語幹末字の種類に関わらず使われるが、現代モンゴル口語では[ɪ:n] (男性語に)或いは[i:n] (女性語に)である。対格語尾においても「文書」には、語尾 -gi、-i\_gi が現れる。現代モンゴル口語の対格語尾は[ɡɪ:ɡi:]、あるいは[ɪ:g/i:g]であり、-gi は[ɡɪ:ɡi:]に対応し、-i\_gi は[ɪ:g/i:g]に対応する。

「文書」に現れた口語の現われと考えられる若干の語尾が現代モンゴル文語では文語として使わ



れている場合がある。例えば、「文書」の与位格語尾の -tu/-tü と -du/-dü は口語の現われと考えられる語尾であるが、これが現代モンゴル文語では文語的語尾として定着している。

## 注

- (1) 誤記の可能性がある。
- (2) 「満文原檔」のモンゴル語檔案は乾隆期に重鈔される際に、満洲語に翻訳されて収録されている。その満洲語檔案が「満文老檔研究会」によってローマ字に転写され、日本語に訳された。
- (3) [i:]は非円唇前舌狭母音である。[ɪ:]は非円唇で、中舌よりも前寄りの半狭母音である。[i:]は女性語の中に発音され、[ɪ:]は男性語の中に発音される。
- (4) ここで挙げた例の日本語訳は筆者によるものである。
- (5) ここで言う現代モンゴル語は現代モンゴル文語と口語の両方を指す。現代モンゴル文語の規範には与位格語尾の  $\text{ᠬᠤ-tu/-tü}$  は子音字 b、g、γ、s、d にで終わる語幹に付き、 $\text{ᠬᠤ-du/-dü}$  は母音字と子音字 n、m、l、ng で終わる語幹に付く。

## 参考文献

### [モンゴル語]

舍・羅布蒼旺丹 勒・宝魯特編 巴・斯欽巴特爾 吉木斯 転写

1991 『ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠠᠨᠤ ᠵᠢᠨᠠᠭᠤᠳᠤ ᠠᠨᠤ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ ᠬᠡᠯᠡ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ ᠬᠡᠯᠡ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ mongyul kele-nügüd-ün qaričayuluysan kele jüi (モンゴル諸言語の比較語法)』 内蒙古教育出版社出版

李保文・南快

1996 「17 世紀初頭の 43 件のモンゴル語文書」 『17-duxar jayun-u ekin-dü qolbuydaqu 43 qubi mongyul bičig (17 世紀初頭の 43 件のモンゴル語文書)』 『内蒙古社会科学(蒙文版)』第一期 86-118 頁、第二期 93-122 頁。

嘎拉桑

1979 『ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠠᠨᠤ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠳᠤ ᠠᠨᠤ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ ᠬᠡᠯᠡ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ mongyol üsüg-ün bügüde tayilburi bičig(蒙文詮釈)』 内蒙古人民出版社 139-150 頁。

嘎日迪

2008 『ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠠᠨᠤ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠳᠤ ᠠᠨᠤ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ ᠬᠡᠯᠡ ᠵᠢᠨᠠᠵᠢᠭᠤᠯᠤᠰᠠᠨ dumdadu erten-ü mongyol kelen-ü sudulul-un uduridqal(中古モンゴル語の研究導論)』 内蒙古人民出版社。

### [日本語]

栗林均

1989 ダグル語『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂 597-603 頁。

東郷(ドゥンシヤン)語『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂 1281-1288 頁。

1992 保安(バオアン)語『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下—1)』三省堂 88-92 頁。

モンゴオル語『言語学大辞典 第4巻 世界言語編(下—2)』三省堂 492-498 頁。

1999 「『孝経』のモンゴル文語における曲用語尾の特徴」 『알타이학보 한국알타이학회 제 9 호 1999 년 6 월。』

2009 『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』 東北大学東北アジア研究センター叢書 第33号。

栗林均・海蘭

2015 『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』東北アジア研究センター報告 第17号。

満文老檔研究会訳注

1961 『満文老檔』東洋文庫。

[中国語]

李保文

2000 《爰新国天命天聪两朝蒙古文书档案简介》《明清档案与蒙古史研究》内蒙古人民出版社 217-276 頁。

2001 《天命天聪年间蒙古文档案译稿(上)》《历史档案》中国第一历史档案馆第3期、3-8 頁。

2001 《天命天聪年间蒙古文档案译稿(中)》《历史档案》中国第一历史档案馆第4期、3-9 頁。

2002 《天命天聪年间蒙古文档案译稿(下)》《历史档案》中国第一历史档案馆第1期、3-4 頁。

M.H. 奥尔洛夫斯卡娅著 郭守祥译

2004 《《黄金史》语言》内蒙古教育出版社。

(M.H. Орловская 1984 *Язык《Алтан тобчи》*. Издательство Академии Наук СССР. Москва.)

内蒙古大学蒙古学研究院、蒙古文研究所

1999 《蒙汉词典》内蒙古大学出版社。

清格尔泰

1991 《蒙古语语法》内蒙古人民出版社。

[英語]

Poppe, Nicholas

1954 *Grammar of Written Mongolian*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

[ロシア語]

Н.Н Поппе

1939 *Монгольский словарь, Мукаддимат ал-адаб*. Издательство Академии Наук СССР Москва-Ленинград.

[ドイツ語]

Poppe, Nicholas

1951 *Khalkha-mongolische Grammatik*. Franz Steiner, Wiesbaden.